歴史散歩

れきしさんぽ No.13

久留米の石橋

おおはし歴史公園に復元された石浦大橋

1　石浦大橋(久留米市大橋町合楽)

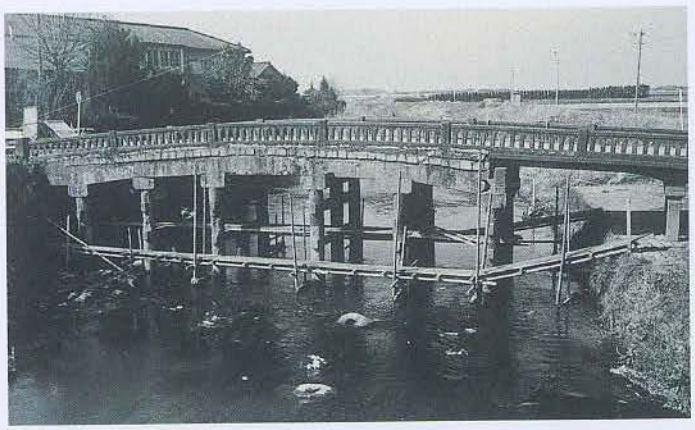
久留米から豊後に向かう豊後街道は、耳納山地沿いに草野町を通過する山辺道と筑後川沿いに走り田主丸町を通過する下道がありました。この石橋は豊後下道が筑後川の支流である巨勢(こせ)川を越える地点である指出村と石浦村の間に架けられたものです。

この橋は元禄11年に建造されています。福岡県では大牟田市の国指定早鐘(はやがね)眼鏡橋(延宝2年・1674)、筑後市熊野の県指定熊野神社の眼鏡橋(元禄10年・1697)に次ぐ古いもので、桁橋では最も古いものです。

規模構造は桁行５間(柱真々距離で15.900m)、梁行２間(同前4.030m)の石造柱梁式の石橋です。中央柱間が２間(13尺)、他の四柱間寸法は10尺、梁行方向も2柱間寸法１間(6.5尺)で設計されています。

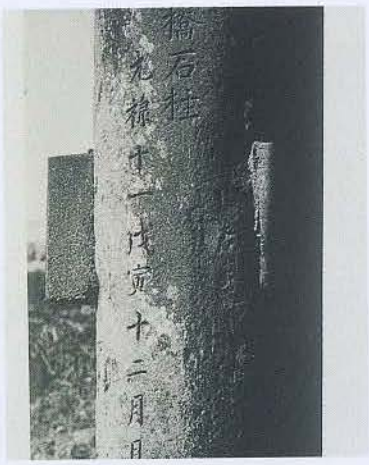
石材は肘木、桁、梁材とも江戸時代後期に活発な利用が始まる山北石(やまきたいし)(浮羽郡浮羽町)です。柱脚は上部下部の二本で構成されており、中央部が最も高く、両端が約50cm低いことから、中央部が高くなった橋です。享和２年(1802)の『筑紫紀行』によれば、梁には丸木木材を敷木として利用し、その上に土をかぶせた「土橋」であったようです。

石橋は何度も補修を重ねてきていますが、中央桁の上流側の面に「桁梁改造之　明和二乙酉三月」とあり、これが最初の補修です。それ以後は明治初年に桁上を今日のみかげ石に替え、大正10年(1922)に



（昭和４０年代の石浦大橋）

「橋石柱
元禄十一戊寅十二月日建」



（「元禄11年」銘のある柱）

は鉄筋コンクリートをもって北側に継ぎ足し、木製貫を鉄筋コンクリートに改めています。昭和28年(1953)には鉄筋コンクリートの欄干が造られるなど、修理補修がなされました。しかし、昭和48年に水害のおそれ、道路交通の不便、橋桁の折損で危険な状態にあるということから、やむなく石材を保存し、復元を待つことが決まり、同50年3月には解体され、部材は善導寺に保管されることになりました。

昭和56年には地元大橋校区より石浦大橋の復元の要望があり、同63年には地元より石浦大橋を復元してこれを校区町作りのシンボルとする旨の陳述書が提出されています。平成4年には復元地の検討及び、地元と行政内部の協議に入り、平成8・9年の２か年で『地域総合整備事業』の「ふるさとづくり事業」(自治省)によって「おおはし歴史公園」事業を立ち上げ、その公園のメインとして石橋を復元しました。保管石材は使用可能・補修が必要・使用不可能・欠陥石材に分類し、可能な限り解体部材を使用し、新部材は原石山地(山北石)周辺の同等の石材を利用しています。また、石橋の石柱基礎工事は、解体工事際、未調査であったため、類似例の架設技術(梯子胴木(はしごどうず)と呼ばれる方法)を参考に施行しています。元禄11年から丁度300年にあたる平成10年3月に復元が完了し市民に公開することになりました。

{参考文献}

山本輝雄　『大橋解体工事報告書－久留米市大橋町所在の元禄銘古橋の調査－』
(久留米土木事務所　昭和50年［1975］)

2 高良山御手洗橋(みたらいばし)(久留米市御井町字梅ヶ谷206-1他)

高良山の旧参道を末次四郎が寄進した標石をたどりつつ登っていくと、放生池(御手洗池)は「四町」の標石のすぐ上にあります。この池に架けられた橋が御手洗橋です。この池は参道の下を流れる南谷と吉見獄から流れてくる北谷の水を集めてできたものです。今ではすっかり水量は減ってしまいましたが、かつては有名な営の名所でした。

ここは元は山田で、沼地の状態であり土橋がかかっていたが、享保年間(1726～35)に橋を架け、池の中島に経文を埋めたと伝えてられています。安永年間には久留米藩が放生池を営んだと伝えられ、久留米藩の正史である『米府年表』安永元年(1772)の条には「十一月高良山放生池御手洗橋成る」と記録されています。この時期に橋が建設されたのは事実でしょう。現存する御手洗橋の金銅製擬宝珠の刻銘に「安永二癸巳年六月吉祥日　高良山御手洗橋」とあるからです。

この池は藩の御路地方の管理であったことから、橋の建設も藩営工事であったと推測されますが、

（高良山御手洗橋）

安永架橋の橋が木橋であったのか石橋であったのかは不明です。

現存する御手洗橋は享和３年(1803)に架橋されたもので、桁行５間（10.090m）、梁行２間（4.030m）の桁橋です。その両側に１間分の袖高欄がつきます。袖高欄を含めば全長は桁行14.134m、梁行は5.950mです。

構造は梁が中央で２分され、角梁とも２パーツになります。桁は中央で梁受桁１間を渡し、梁受桁は上部に反りを持っています。床受の桁は南から各柱上で継いでおり、部材は６パーツからなります。床石は梁桁に３枚が並び、下部の床桁受上でつなぎます。

高欄、地覆石、貫は平桁で、擬宝珠柱は円柱です。擬宝珠柱には金銅金物の擬宝珠が付いていますが2個は鉄製のものが付いています。高欄の擬宝珠柱間にある中央の束の左右外側に蟇股（かえるまた）状半片形をつくり出しているのは特徴的です。石材は浮羽郡の山北石でしょう。山北石であれば、石工も山北石工でありましょうが、それを明らかにする資料はありません。

なお、安永２年銘の擬宝珠は享和３年の再建の際に橋の歴史を伝えるために再利用されたのでしょう。この金銅擬宝珠は久留米藩の御用鋳物師（ごよういものし）植木家の貴重な作品でもあります。

建造年代は明確であり、保存状態も良く、由緒もある石橋の残存例として重要なものと評価されています。

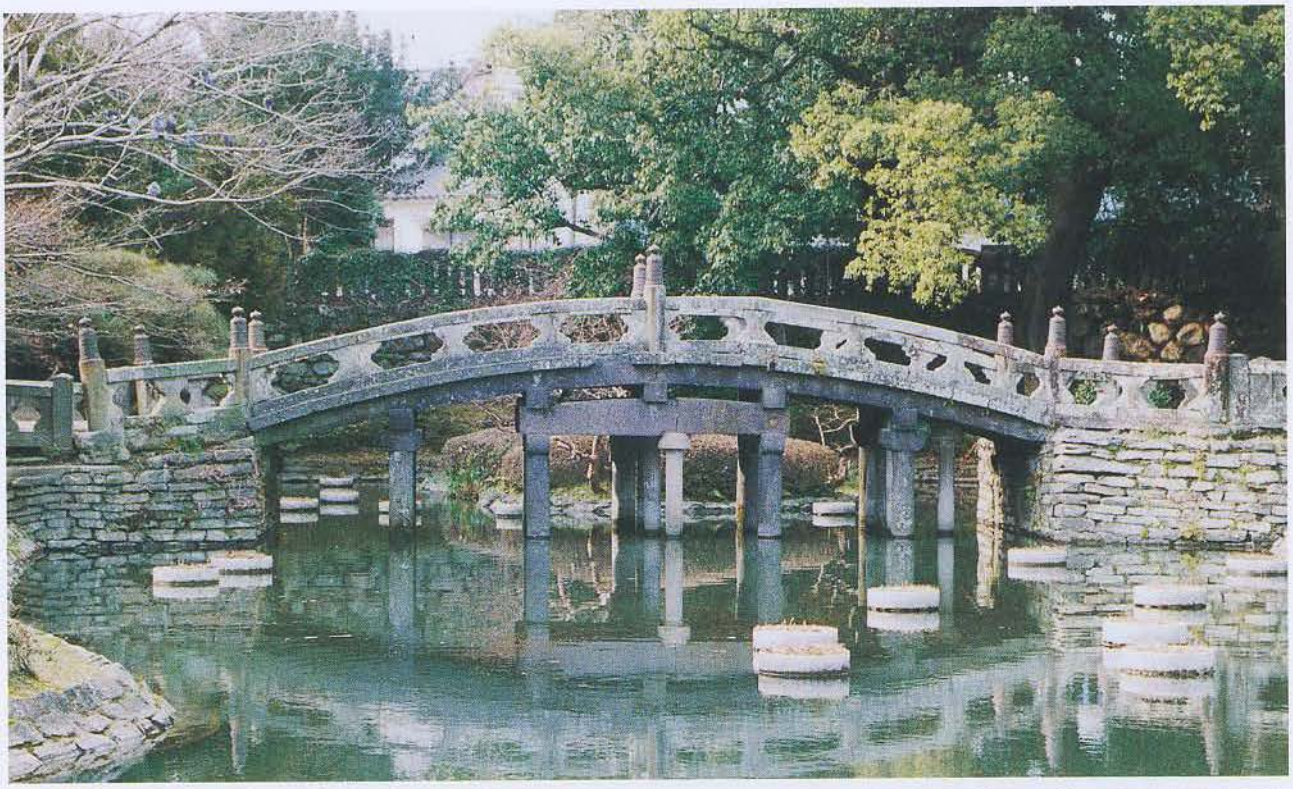
【参考文献】 佐藤正彦 「高良山御手洗橋調査報告」1999　久留米市立御井小学校父母教師会編 『御井町誌』 1986
稲次成令･浅野陽吉共著・古賀寿編 『高良山雑記』 1969

3 五穀神社の石橋（久留米市通外町58-1）

寛永２年(1749)、久留米藩七代藩主有馬頼徸（よりゆき）によって創建された五穀神社の放生池にかけられた石造反橋です。

この神社は藩営に近いものであり、神社神殿は大庄屋中から、拝殿は総郡中から寄進されたものです。この石橋も文化３年(1808)に総郡中から寄進されたものです。

本来は桁行５間(9.610m)、梁行２間(2.810m)の石造桁橋です。袖高欄部分まで含めば全長12.920mとなります。現在は中央にコンクリートの円支柱が入れられているため桁行は６間となっています。高欄付き



（五穀神社の石橋－市指定文化財）

擬宝珠柱は片側に５本あり、反橋上には３本あります。袖高欄擬宝珠柱は円形礎石上に立てられます。橋両側の１間の袖高欄部分は土間床です。鉄製擬宝珠は当初のものではなく、戦後の寄進です。束は曲線の鼓形で、反橋部分は擬宝珠柱間に３個、袖高欄部分には１個が配置されています。

反橋中央部は円柱状に肘木をのせて梁をうけ、前後柱上の肘木は桁方向で、中央中柱は梁方向です。中央中柱上は肘木を梁方向にのせ、その肘木上に桁を入れて梁をのせて床受け桁を受けます。反橋の両端部の柱は角材で、肘木上に梁をのせ床受桁を受けています。床石は３列に分かれ、東面で25枚、中央で23枚、西側で22枚です。石材は長野石(八女市長野産出の阿蘇凝灰岩)で、築造したのは同所の石工であることから、当時の筑後地方の架橋技術をしめすものとして、また、市内では高良山御手洗橋についで古い橋であり、貴重な石造反橋として平成12年2月に市の文化財指定を受けました。

〔参考文献〕 判屋八平 『(仮)五穀神社作り物絵図』 天保３年(1832)
豊田丈助 『公用見聞録』 天保５年(1834) 佐藤正彦 『五穀神社反橋調査報告』 1999

※交通機関　西鉄バス商学部前下車東へ約1km

※交通機関　西鉄バス五穀神社前下車直ぐ北

発行機関名　久留米市教育委員会
〒830-8520 久留米市城南町15-3
文化財保護課　0942-30-9225
久留米市埋蔵文化財センター
0942-34-4995
久留米文化財収蔵館 0942-38-6194